

メディア・モードの機能は 言語使用をどのように変えるか？

——携帯メール・LINE チャット・対面会話

における終助詞の使用と不使用を例に——

落合 哉人

キーワード：LINE、携帯メール、対面会話、CMC、終助詞、確認

要 旨

本稿では、2000年代の携帯メールと2010年代のLINEチャット及び、それらと概ね同時期の対面会話における終助詞の出現傾向について調査を行なった。調査の結果、2000年代に収集された対面会話と2010年代に収集された対面会話では、特定の終助詞（「よね」）や終助詞が付かない言い切りの活用語終止形の出現傾向に関して違いがあるものの、携帯メール及びLINEチャットではそれらの要素に関して、対面会話とも違う形で出現傾向の違いが見いだされたり、対面会話よりも出現が少なかったりすることが明らかになった。これを踏まえそのような言語使用がなされる背後に、主要なモダリティ、記録性及びオーバーラップの有無、表示形式、既読表示といった機能的特性があることを考察した。

1. 本稿の位置付け

コンピュータや、コンピュータと類似の機能を持つ携帯端末を介したコミュニケーションを CMC (Computer-Mediated Communication) と言い、CMC を対象とする研究 (CMC 研究) のうち特に談話分析を中心的な手法として、言語ないし言語使用について検討する下位領域を CMDA (Computer-Mediated Discourse Analysis) と呼ぶ(Herring &

Androutsopoulos, 2015)。英語圏を中心とする CMDA 関連研究ではこれまで、言語使用のあり方に影響を及ぼし得るメディア・モード¹の特性について、様々な分類が提案されてきたが(Clark & Brennan, 1991; Baym, 1995; Herring, 2007, 2013, 2018 等)、中でも Herring(2007)では、個々のメディア・モードの言語使用が、利用者を取りまく状況的な特性(例:参加者の数、属性、目的等)と、メディア・モード自体の機能的な特性(方向性、記録性、利用可能なチャンネル等)の双方によって規定されるものと想定されている。本稿は、Herring(2007)の議論を踏まえて特に、機能的特性のあり方が、日本語環境ではどのような影響を及ぼしてきたか一考するものである。検討の対象として、2000年代以降の日本国内で広く普及したモードである携帯メールと LINE チャット(以下、LINE)を取り上げ、終助詞の使用(または不使用)の観点から両者における言語使用の特徴を論じる。

携帯メールは 2000 年代はじめ～中ごろを中心に(三宅, 2005; 佐竹, 2005 等)、LINE は 2010 年代後半以降を中心に(岡本, 2016; 加納ら, 2017 等)それぞれ一定の分析があるが、①注目される要素に偏りがある点と、②メディア・モード間の比較に関して不足がある点の 2 点に関してさらなる研究の余地がある。①について、日本語圏では特に、携帯電話を介したインターネット接続が欧米に先駆けて普及したこともあり、携帯電話に端を発する絵文字、スタンプ等の装飾的要素や、携帯メール・LINE における表記の特殊性についてこれまで注目がなされてきたが、一見して指摘しにくい、一般的な言語表現の使用に関する特殊性については、未だそれほど分析が進んでいない問題がある。また、②について、携帯メールは 1999 年～2012 年にかけて、LINE は 2013 年以降、日本語圏において、それぞれ最も利用者が多い CMC の場であるが(総務省情報通信政策研究所, 2020)、前者と後者で言語使用がどのように連続的かということや、それは音声発話のあり方とどの程度対応するかということは、実証的な検討が乏しい。本稿は、これまでの CMC を対象とする日本語研究(三宅, 2005 等)において、用いられることは指摘されているものの、どのように用いられるかは分析が乏しい一般的な言語的要素として終助詞の使用実態に着目するほか、対面会話の音声発話も調査対象に含めることで、以上ふたつの問題の克服をはかる。

¹本稿における「モード」(Mode)は CMDA に関連する最初期の研究である Murray(1988)の用語を援用するものであり、メディアの内部における特定のコミュニケーションタイプを指す。なお、Murray(1988)は、専ら「会話」や「雑談」といったやりとりのあり方そのものを想定してこの語を定義しているが、実質的には(チャット形式の)メッセージ交換ソフト、メール、文書作成ソフト等、ソフトウェアに対応する用語として扱っている。本稿も基本的には、特定のメディア(例:スマートフォン)の内部で作動するソフトウェアを指す語として「モード」を用いる。

本稿の構成は次の通りである。2 節では、本稿における調査の対象と内容について、それぞれ説明する。続いて 3 節では、対面会話における調査結果について、4 節では、携帯メール及び LINE における調査結果について、それぞれ報告する。さらに 5 節では、3 節及び 4 節の調査結果についてメディア・モードの機能との関わりから考察を行う。6 節は、本稿のまとめである。

2. 調査の対象と内容

まず、本節では、本稿で対象とするデータ (2.1)と、調査の内容(2.2)について、それぞれ説明を行う。

2.1 対象とする談話資料について

第一に、対象とするデータについて述べる。本稿では、科学研究費補助金の研究成果報告書である三宅(2006)で公開されている携帯メールのログデータ 343 談話 (1920 発信/2120 ターン²) と、筆者が独自に集めた LINE のログデータ 66 談話 (計 7963 発信/5173 ターン) を中心的な調査対象とする。前者は 2003 年～2005 年に東京の大学生から収集されたものであり、後者は 2014 年～2019 年に東京・千葉・茨城の、大学生及び 20 代前半の社会人から収集されたものである³。携帯メールの談話 1 件の長さ

²携帯メール及び LINE におけるターンは同一の話者が同一の話題に言及する範囲に基づいて数えた。たとえば(i)では、A、B それぞれが一度の発話で 2 回ずつターンを獲得するものとみなした。これは、このような複数の話題の同時進行が基本的に生じない対面会話との比較を考慮する処理である (詳しくは、落合(2019)を参照されたい)。

(i) (出身高校の場所について | A が同級生に話しかけられないことについて)

A1 : こちら田舎ですから (笑)
A2 : 恥ずかしがり屋なんですよ
 シャイボーイだから (笑)
B1 : やーいやーい田舎者～
B2 : がんばって (笑) (LINE, 009)

³やりとりのあり方を大きく、勧誘や依頼、待ち合わせ場所の決定等、明確な課題解決を目的にはじめられたか、または同様のやりとりが談話の途中で挿入され、ターン数の上で全体の 1 割を超えていると判断されたものと、そうでないものに分けると、携帯メールでは 264 談話が前者に、79 談話が後者に該当し、LINE では 26 談話が前者に、40 談話が後者に、それぞれ該当する。なお、本稿 3 節以降の調査・分析では、そのような課題の有無を統制した際も (少なくとも議論の中で触れる限りの内容において) ほぼ同様の結果が得られたことから、話題のあり方と言語使用の関係については言及しない。

は平均して 3 往復程度であり、LINE の談話 1 件の長さはスマートフォンのスクリーンショットで 20 枚程度である⁴。

また、本稿では、携帯メール・LINE との比較対象として、同時期に収集された『名大会話コーパス』(NUCC)の会話 8 会話 (計 296 分/4567 ターン⁵) と、『日本語日常会話コーパス (モニター公開版)』(CEJC)の会話 7 会話 (計 162 分/2747 ターン) を扱う。NUCC は 2001 年から 2003 年に収録された日常会話の書き起こしデータを収めたコーパスであり (藤村ら, 2011)、CEJC は 2016 年以降に録音・録画された日常会話を収めたコーパスである (田中ら, 2018; 小磯ら, 2019)。本稿では、両コーパスのデータのうち、I) すべての参加者が 10 代後半~20 代後半の東京方言話者であり、非初対面であること、II) 移動中や接客中ではないこと、III) 特定の課題解決を目当てにはじめられたものではないこと、の 3 点を満たす対面会話をすべて対象とした⁶。

なお、以上で触れた携帯メール・LINE・対面会話の各談話資料において、やりとりがなされる際の状況はなるべく統制したが、独自に収集した談話、データベース及びコーパスの談話ともに、数に限りがある都合上、参加者の人数、母方言、ジェンダー等に関して十分に統制しきれていない部分も存在する。たとえば、参加者の人数については、携帯メール及び NUCC においてすべてのやりとりが 1 対 1 であるのに対して、LINE では 66 談話中 27 談話で、CEJC では 7 会話中 4 会話で、それぞれ 3 人以上の参加者が関わっている。同様に、母方言については、携帯メールにおいて全参加者の母方言が不明である⁷。さらに、参加者のジェンダーも特に LINE において一部、不明な者が存在する。これらの特性が調査に影響する可能性については一部、後述の議論でも触れるが、多くの具体的な検証は今後の課題とせざるを得ない。

⁴このように 1 談話あたりの長さが違うことは調査において若干問題となり得るが、本稿執筆時点でアクセス可能な携帯メールのデータには限りがあったことから、暫定的にこれらふたつのデータセットを対象とした。なお、この問題については今後「Senshu-Univ. Keitai-mail Corpus (SKC)」(宮嵜ら, 2020)を用いることでさらなる検討の余地がある。また、LINE のログデータの収集では、なるべくスマートフォンを用いて交わされたやりとりであることを条件とした。

⁵対面会話におけるターンは基本的に NUCC を基準に数えた。具体的には、NUCC においてあいづち相当の発話がターンとして記述されていないことを踏まえ、CEJC でも明らかにあいづちと思われる発話を除いた上、連続する同一話者の発話をまとめて 1 ターンとして数えた。但し、NUCC でも一部、あいづちであるとは考えにくい発話 (質問に対する応答等) があいづちとして記述される例があったため、会話の相手の後続する反応から明確なものに限り、修正を施した。

⁶対面会話の談話資料において特定の課題解決を目当てとしないもののみ対象としたのは、雑談を中心とする NUCC において、そのような談話がほとんど見られないことに基づく。

⁷とはいえ、やりとりは基本的に筆者 (東京方言母語話者) の自省に照らして東京方言を基調とするものである。なお、LINE の参加者はすべて東京方言話者である。

2.2 調査の内容について

第二に、調査の内容について述べる。本稿の調査では、2.1 で挙げた各データにおける言語使用のうち、特に終助詞の使用に着目して検討を行う。終助詞は、携帯メール及びLINEに関する先行研究（佐竹，2005；三宅，2005；岡本，2016等）において、しばしばそこでの言語使用が話しことば的であることの証拠として観察がなされてきた要素であるが、その具体的な使用実態については、筆者が知る限り具体的な調査がなされてきたわけではない。従って、個々の終助詞の量的な出現傾向について、実際に音声発話とも比較しつつ調査することは、携帯メールやLINEの言語使用が実際のところ、どの程度話しことば的であるのか（あるいは話しことば的ではないのか）、という問題の検証においてまず、重要な取り組みとなることが想定される。

具体的な調査の内容として、本稿では2.1で挙げた談話資料に含まれる終助詞のうち、特に形容動詞を除く活用語（動詞・形容詞・助動詞）が主節の末尾で終止形として現れた際に後接するものの出現傾向を観察した⁸（調査では、全文検索システム『ひまわり』（NUCC：ver.1.6.1／CEJC：ver.1.6.4）、形態素解析器 MeCab（ver.0.996）、形態素解析辞書 UniDic を使用した⁹）。その際、終助詞とみなす語は、国立国語研究所（1951）で言及される語とその複合形を主に挙げた¹⁰ほか、何も付かない言い切りの終止形も \emptyset として数を数えた。なお、終助詞の中には複数の音調を持ち、音調ごとに異なる意味を持つと捉え得るものもあるが（橋本，1992；井上，1997等）、携帯メールやLINEでは、表記の上で音調の違いを十分観察し難いことを踏まえ、音調の区別はすべてのデータで一律に措いた（同様に延伸と非延伸も区別を行わなかった）。また、短い間に明確に同じ形式が繰り返される場合（「あるねあるね」等）、終助詞及び前接要素の出現は一度のみと見なした。

⁸ 観察され得る終助詞すべてを対象としないのは、なるべく問投助詞と終助詞を切り分けるためである。なお、形容動詞は特に終止形の場合、「名詞+だ」との区別が難しい用例が多いことから対象に含めなかった。また、引用節の内部も調査の対象に含まれていない。

⁹ 作業手順として、動詞・形容詞・助動詞の終止形を一括して検索し、そこに終助詞が付くものを観察した。そのため、UniDicで終止形ではなく意志推量形として扱われている「だろう」「（よ）う」に付加される終助詞や、表記の問題に起因して拾い漏れのある前接要素及び終助詞は調査対象から外れている。

¹⁰ 禁止・命令・勧告を表す「な」及びその他の品詞と捉え得る「の」「のに」「たら」「けれども」「って」「て（で）」「てば」「が」「に」「ばこそ」「やら」は対象外とした。また、調査の都合上、複数の終助詞の複合と捉え得る「よね」「かな」等と単独で見られる「よ」「ね」「か」「な」等は別の語として数えた。なお、表記の上で何らかの終助詞であると考えられるが、特定できないもの及び明確に方言形（「ニセ方言」（田中，2010）も含む。）の終助詞と捉えられるもの（例：「ねん」「で」等）は「その他」として数を数えた。

3. 対面会話における終助詞の出現傾向

次に本節では、携帯メール及び LINE の言語使用を検討するにあたって参照点となる、対面会話における終助詞の出現傾向を示す。全体的な調査結果は表 1 の通りである¹¹。

表 1 対面会話の主節末尾における活用語終止形に付加された終助詞の出現傾向

NUCC					CEJC				
順	語	数	割合	頻度	順	語	数	割合	頻度
1	∅	1648	48.7%	36.1	1	∅	735	42.0%	26.8
2	よね	573	16.9%	12.5	2	よ	308	17.6%	11.2
3	よ	460	13.6%	10.1	3	ね	217	12.4%	7.9
4	ね	356	10.5%	7.8	4	よね	179	10.2%	6.5
5	な	70	2.1%	1.5	5	か	88	5.0%	3.2
6	つけ	61	1.8%	1.3	6	つけ	64	3.7%	2.3
7	か	48	1.4%	1.1	7	な	52	3.0%	1.9
8	もん	37	1.1%	0.8	8	もん	22	1.3%	0.8
9	もんね	33	1.0%	0.7	9	わ	21	1.2%	0.8
10	かな	25	0.7%	0.5	10	かね	18	1.0%	0.7
11	や	18	0.5%	0.4	11	もんね	15	0.9%	0.5
12	かね	15	0.4%	0.3	12	かな	10	0.6%	0.4
13	わ	14	0.4%	0.3	13	や	8	0.5%	0.3
14	よな	8	0.2%	0.2	13	よな	8	0.5%	0.3
15	かな	6	0.2%	0.1	15	ぜ	2	0.1%	0.1
15	つけな	6	0.2%	0.1	15	つけな	2	0.1%	0.1
17	ぞ	3	0.1%	0.1	17	ぞ	1	0.1%	0.0
18	もんな	2	0.1%	0.0	17	べ	1	0.1%	0.0
19	かね	1	0.0%	0.0		∅あり計	1751	100.0%	63.7
19	わな	1	0.0%	0.0		∅なし計	1016	58.0%	37.0
19	ぜ	1	0.0%	0.0					
19	つけかな	1	0.0%	0.0					
	∅あり計	3387	100.0%	74.2					
	∅なし計	1739	51.3%	38.1					

¹¹ 表中の「順」は出現順位を、「語」は確認された終助詞を、「数」は出現数を、「割合」は出現数全体に占める割合を、「頻度」は 100 ターンあたりで換算した調整頻度を、それぞれ示す。

調査の結果、本稿で対象とした談話資料では、NUCC において計 1739 語の終助詞が、CEJC において計 1016 語の終助詞が、それぞれ確認された。表 1 から、終助詞が付いたものに限って見た場合、100 ターンあたりで換算した全体的な出現数（以下、調整頻度）は NUCC と CEJC でほぼ同じであるが（NUCC：38.1 例／CEJC：37.0 例）、終助詞が付かない言い切りの終止形（ \emptyset ）の調整頻度には若干の違いがあることが読み取れる（NUCC：36.1 例／CEJC：26.8 例）。また、個別の語のうち相対的に出現が多いものでは、「よね」の調整頻度、出現順位に一定の違いがあることがわかる（NUCC では 12.5 例、 \emptyset を含めて出現順位第 2 位／CEJC では 6.5 例、 \emptyset を含めて出現順位第 4 位）。

以上を踏まえ、 \emptyset 及び「よね」の用例を詳しく見ると、まず、 \emptyset については品詞別で形容詞に後接する際、調整頻度に最も大きな違いがあり（NUCC の結果はおよそ CEJC の 1.6 倍／表 2）、特に NUCC、CEJC ともに \emptyset が後接する形容詞の中で最も出現の多い「ない」の調整頻度に 2 倍以上の差が確認された（表 3）。一方で、そのような「ない」の中心的な現れ方は、NUCC、CEJC ともに「じゃない」の一部や補助形容詞として(1)のように何らかの認識への確認を求めるものである様子が見られた¹²。

表 2 対面会話における \emptyset の前接語彙の品詞別調整頻度

	動詞	形容詞	助動詞
NUCC	6.5	9.4	20.3
CEJC	5.9	5.9	15.6

表 3 対面会話における \emptyset の前接形容詞上位 3 位の調整頻度

NUCC			CEJC		
順	語	頻度	順	語	頻度
1	ない	4.5	1	ない	1.9
2	すごい	0.8	2	やばい	0.7
3	いい	0.5	3	いい	0.5

(1)（若者らしい言葉遣いで話すべきか否かについて）

F147：若者らしく。

F114：でも、うちら、（うん）別に、ふ、普段からこうじゃない？

F147：<笑い>そうだよね。

¹²特に NUCC における音調の記述に起因して曖昧なものもあるが、NUCC、CEJC ともに少なくとも「形容詞ない+ \emptyset 」の 6 割以上がそのような用例であった。

F114：何か、無理に若者にしなくてもよくない？

F147：そう、そう、そう。(うん) そうだよね。((後略)) (NUCC, 065/下線は筆者)

また、「よね」については、談話における現れ方として(2)の 01、02、04 行目のように何らかの認識について確認したり、確認を求めたりする場合と、(03)の 03 行目のように「のだ」を伴って一方的な情報提供を行う場合¹³に現れることが窺える。そこで、確認された「よね」の用例を、前者の場合（「確認／確認要求」）に該当するものと、後者の場合（「情報提供」）に該当するものに分けると、NUCC、CEJC とともに 9 割以上の用例が「確認／確認要求」を担う様子が見られた（表 4）。

(2) (地元にあった馴染みの駄菓子屋について)

01 古賀：駄菓子屋さ：(0.382)かなりなくなったよね。

02 金子：やばいよね。

03 尾形：ないね。

04 金子：かなりやられてるよね。

05 尾形：うん。

06 古賀：さのやなくなってみたいな。 (CEJC, T006_008a/下線は筆者)

(3) (音楽の楽しみ方について)

01 龍之介：軽音楽じゃないけど。

02 大場：うん。

03 龍之介：そうゆう バンド的な?(0.406)感じの (0.535) ぐらいの:レベルの音楽ってゆるゆるの やったことないんだよね。

04 大場：うん。

05 龍之介：から:ちょっと そうゆうのはちょっと俺わかんないな。

(CEJC, T010_004/行番号は筆者)

表 4 対面会話における「よね」の用法分け () は出現数

	確認／確認要求	情報提供
NUCC	97.0% (556 例)	0.3% (17 例)
CEJC	90.5% (162 例)	9.5% (17 例)

¹³ 「のだ」を伴うすべての用例が一方的な情報提供となるわけではないことに留意されたい。

これらの観察に基づくと、NUCC と CEJC の間にある終助詞の出現傾向の違いは、認識の確認（またはその要求）という行為の頻度に依るところが大きいことが示唆される。但し、2 節で述べた通り、本研究が対象としたデータではやりとりがなされる際の状況に関して十分に統制を行っていない部分があり、特に NUCC と CEJC では、参加者の数に違いがある（NUCC はすべて 1 対 1 の会話であるのに対して、CEJC では 3 人以上の会話が含まれる）。従って、ふたつのコーパスの対面会話で見られる確認（要求）の頻度の違いは、直ちに通時的な言語使用の変化と結びつけることはできず、単に聞き手の数に応じて生じる発話展開の特徴（どの程度細かく認識の共有を行いつつ話を進めることができるか）を反映しているに過ぎない可能性もある。

4. 携帯メール・LINE における終助詞の出現傾向

前節では、2000 年代初頭における対面会話の談話資料と、2010 年代後半における対面会話の談話資料を比べ、ア) 主節末尾における活用語終止形に付加された終助詞全体の調整頻度はほぼ同じであること、イ) 終助詞が付かない言い切りの終止形 (0) と「よね」の現れ方に違いが見られ、その背後に共通して確認（要求）の頻度の違いがあること、の 2 点を示した。続いて本節では、携帯メール及び LINE における終助詞の出現傾向を示す。全体的な調査結果は、表 5 の通りである¹⁴。

表 5 携帯メールと LINE の主節末尾における活用語終止形に付加された終助詞の出現傾向

携帯メール					LINE				
順	語	数	割合	頻度	順	語	数	割合	頻度
1	0	826	46.8%	39.0	1	0	2295	62.5%	44.4
2	よ	349	19.8%	16.5	2	よ	351	9.6%	6.8
3	ね	174	9.9%	8.2	3	ね	204	5.6%	3.9
4	よね	85	4.8%	4.0	4	な	186	5.1%	3.6
5	な	79	4.5%	3.7	5	わ	166	4.5%	3.2
6	か	65	3.7%	3.1	6	よね	139	3.8%	2.7
7	わ	54	3.1%	2.5	7	か	81	2.2%	1.6
8	かな	37	2.1%	1.7	8	かな	49	1.3%	0.9
9	っけ	20	1.1%	0.9	9	ぞ	39	1.1%	0.8
10	その他	15	0.8%	0.7	10	っけ	37	1.0%	0.7

¹⁴ 表中の「順」は出現順位を、「語」は確認された終助詞を、「数」は出現数を、「割合」は出現数全体に占める割合を、「頻度」は 100 ターンあたりで換算した調整頻度を、それぞれ示す。

11	や	8	0.5%	0.4	11	その他	31	0.8%	0.6
12	かい	6	0.3%	0.3	12	よな	29	0.8%	0.6
12	ぜ	6	0.3%	0.3	13	かね	11	0.3%	0.2
14	さ	5	0.3%	0.2	13	や	11	0.3%	0.2
15	かね	4	0.2%	0.2	15	ぜ	10	0.3%	0.2
15	ぞ	4	0.2%	0.2	16	もん	8	0.2%	0.1
17	い	3	0.2%	0.1	17	もんね	4	0.1%	0.1
17	かしら	3	0.2%	0.1	18	さ	3	0.1%	0.1
17	もんな	3	0.2%	0.1	18	もんな	3	0.1%	0.1
17	もんね	3	0.2%	0.1	20	かい	2	0.1%	0.0
22	もん	2	0.1%	0.1	20	かしら	2	0.1%	0.0
22	よな	2	0.1%	0.1	20	つけな	2	0.1%	0.0
22	わね	2	0.1%	0.1	20	べ	2	0.1%	0.0
22	わよ	2	0.1%	0.1	24	かよ	1	0.0%	0.0
26	かよ	1	0.1%	0.0	24	ぞよ	1	0.0%	0.0
26	さね	1	0.1%	0.0	24	つけか	1	0.0%	0.0
26	ぜい	1	0.1%	0.0	24	つけね	1	0.0%	0.0
26	つけか	1	0.1%	0.0	24	わな	1	0.0%	0.0
26	つけな	1	0.1%	0.0	24	わね	1	0.0%	0.0
26	べ	1	0.1%	0.0	24	わよ	1	0.0%	0.0
26	べよ	1	0.1%	0.0		〇あり計	3672	100.0%	71.0
26	わな	1	0.1%	0.0		〇なし計	1377	37.5%	26.6
	〇あり計	1765	100.0%	83.3					
	〇なし計	939	53.2%	44.3					

調査の結果、本稿が対象とした談話資料では、携帯メールにおいて計 939 語の終助詞が、LINE において計 1377 語の終助詞が、それぞれ確認された。表 5 から、終助詞が付加されたもののみを見た場合、携帯メールと LINE では、全体的な調整頻度に約 1.7 倍の違いがあることがわかる（携帯メール：44.3 例/LINE：26.6 例。NUCC と CEJC の結果も参照すると、携帯メール>対面会話>LINE という並びになる¹⁵）。一方、終助詞が付かない言い切りの終止形 (〇) に関しては寧ろ LINE の方が、携帯メールより調整頻度が高いことが読み取れる（携帯メール：39.0 例/LINE：44.4 例）。前節で述べた通り、1 対 1 の会話のみ含む NUCC のデータと、3 人以上による会話が含まれる CEJC のデータでは、前者の方が 〇が多いことを踏まえると（仮にそのような人数と終助詞の出現傾向の関係が確かにあるとしても）、1 対 1 の談話のみ含む携帯メ

¹⁵ なお、LINE のデータを 1 対 1 の談話に限った場合の調整頻度は 30.3 例であった。

ールと、半数程度が3人以上による談話である LINE では、対面会話とは別の傾向があるものと捉えられる。また、個別の語のうち特に「よね」は、相対的に携帯メールで多いが、調整頻度、出現順位ともに NUCC 及び CEJC より低い。これらをまとめると、対面会話を基準として携帯メールでは終助詞全体の増加が、LINE では終助詞全体の減少が、それぞれ見られるが、両者ともにすべての語が一律に増減するわけではないと言える。

以上を踏まえ対面会話同様、携帯メールと LINE における \emptyset と「よね」の用例を詳しく見ると、まず、 \emptyset に関しては、品詞別で動詞と形容詞に付く場合に関して、携帯メールと LINE で前接要素全体の調整頻度に違いが見られ（動詞は LINE で携帯メールの 1.7 倍、形容詞は LINE で携帯メールの 2.1 倍／表 6）、具体的な現れ方としては特に(4)(5)のような一語文の増加が観察された（表 7）¹⁶。

表 6 携帯メール・LINE における \emptyset の前接語彙の品詞別調整頻度

	動詞	形容詞	助動詞
携帯メール	3.7	3.2	32.0
LINE	6.4	6.8	31.2

表 7 活用語終止形による一語文の出現傾向¹⁷

	数	割合	頻度
携帯メール	27	18.5%	1.3
LINE	207	30.4%	4.0

(4) (知人 I と一緒に写真に写る人物について)

A : 死相みえてる w

B : やばいよな

A : やばい

B : I さんが生き活きしてるから際立つ

(LINE, 005)

¹⁶ 助動詞の終止形に何も付かない (\emptyset が付く) ものの調整頻度に関して、携帯メールと LINE でそれほど違いがなかった背後には、そもそも一語文として現れ得るものが限られることがあるものと思われる。なお、前節で観察した対面会話において、「主節末の助動詞終止形+ \emptyset 」の調整頻度は NUCC で 20.3 例、CEJC で 15.6 例であり、携帯メール及び LINE よりも低かった。このことから、携帯メールと LINE では、単なる事実説明や宣言等、必ずしも聞き手目当てではない形式が相対的に多いことが窺える。

¹⁷ 表中の「数」は出現数を、「割合」は「動詞+ \emptyset 」及び「形容詞+ \emptyset 」全体に占める割合を、「頻度」は調整頻度を、それぞれ示す。

(5) (必修の授業について)

A: 先生違うよねー

A: やってることも違うのかー

B: 違う

B: Cでしょ?

A: せやで

(LINE, 010)

また、「よね」に関しては、前節で観察した対面会話における「よね」同様、用法を大きく「確認／確認要求」と「情報提供」に分けると、(6)(7)のような「情報提供」を担う用例の出現全体に占める割合が、携帯メール・LINE ともに対面会話よりも高くなる様子が見られた(表 8)。但し、「よね」全体の調整頻度は、両者ともに対面会話より少ないことから、そのような傾向は「確認／確認要求」に関わる用例が相対的に少ないことを反映したものと解釈できる。

(6) (談話の始発部で)

A: 今度、カラオケ行かない(>_<)?

B: いいねえ〜。でもなあ、今お金ないんだよね…来月くらいなら大丈夫なんだけど (^-^;)

A: ホントに(>_<) ? じゃあ、来月行かない(^)?

(携帯メール, 2004, 28-30 / 下線は筆者)

(7) (出身校の教師について)

A: 辞めてたら笑うけど

B: 辞めたることはないやろ

B: C先生ガンとかなってないか心配だわ

A: さあ、、、

B: あんまり C先生の記憶ないんだよねえ

(LINE, 022)

表 8 携帯メール・LINEにおける「よね」の用法分け (() は出現数)

	確認／確認要求	情報提供
携帯メール	72.9% (62例)	27.1% (23例)
LINE	82.7% (115例)	17.3% (24例)

5. 考察

ここまで、ふたつのコーパス（NUCC、CEJC）に基づく対面会話と、携帯メール・LINE における、主節末尾の活用語終止形に付加された終助詞の出現傾向を観察した。携帯メール・LINE を対象とする分析では特に、NUCC と CEJC において若干、出現傾向に揺れが見られた \emptyset と「よね」を取り上げ、対面会話と違う形で出現傾向の違いが見いだされたり (\emptyset)、対面会話より出現が少なかったり（「よね」）することを示した。本節では、そのような \emptyset と「よね」の現れ方について、メディア・モードの機能と結びつけて考察する。以下、5.1 では先に「よね」を取り上げ、続いて 5.2 で \emptyset を取り上げる。

5.1 「よね」について

まず、「よね」について言及する。3 節では、2000 年代に収集された NUCC の談話資料と 2010 年代に収集された CEJC の談話資料を比較した際、NUCC の方が 2 倍ほど CEJC よりも「よね」の調整頻度が高いことを示した。また、4 節では、2000 年代に収集された携帯メールの談話資料と 2010 年代に収集された LINE の談話資料を比較した際、携帯メールの方が若干、LINE よりも調整頻度が高いことを示した。このように、音声を基調とするやりとりと文字を基調とするやりとり双方で年代が早いものの方が「よね」の調整頻度が高いことから、ひとつの仮説として 2000 年代初頭から 2010 年代後半にかけて、若年層の日本語における終助詞の使用実態が変わってきたものと見る余地がある。但し、3 節でも述べた通り、本稿が調査の対象とした談話資料では、2000 年代に収集されたもの（NUCC、携帯メール）がすべて 1 対 1 のやりとりであるのに対して、2010 年代に収集されたもの（CEJC、携帯メール）には 3 人以上によるやりとりも含まれており、この点で「よね」の現れ方の違いは参加者の数の問題に起因するとする説明も想定できる。

今のところ、上記ふたつの仮説（あるいはさらにまた別の要因に基づくとする仮説）の検証は、対象とした談話資料の数に限りがあることから、別稿に譲らざるを得ないが、一方、音声を基調とするやりとりと文字を基調とするやりとりを比べると、前者において相対的に「よね」の出現が多い携帯メールで、後者において相対的に「よね」の出現が少ない CEJC よりも調整頻度が低いことは注目に値する（携帯メール：4.0 例/CEJC：6.5 例）。4 節では、このような「よね」の現れ方が、終助詞全体の現れ方とは必ずしも対応しないこと（終助詞全体の調整頻度は、携帯メールの方が CEJC よ

り高い) や、携帯メール・LINE で特に、認識の確認(またはその要求)に関わる「よね」の減少が見られることを分析した。

以上を踏まえ認識の確認(要求)に関わる「よね」の携帯メール・LINE における相対的な減少の要因について考察すると、この問題は、話しことばと書きことば(または「打ちことば」(田中, 2014))における時間の共有のあり方の違いから捉えることができるように思われる。話し手と聞き手が時間を共有する対面会話では、何らかの確認要求に対して、直ちに反応がなされることを見込めるが、時間の共有が基本的に乏しい携帯メール及び LINE では、そのような対応の見込みを立てにくい。従って認識の確認を基調としたやりとりは相対的に行いづらくなると言え、その結果「よね」の減少が生じたものと解釈できる。

また、携帯メール・LINE におけるそのような時間の非共有は、それ自体所与の特徴ではなく、文字を基調とすること、記録性が高いこと、オーバーラップが生じないこと、といった機能的特性に基づいて生じる現象であることに留意されたい。それらの特性のうち文字を基調とすることは、音声と比べて言語産出に時間がかかることを意味し、記録性が高いことは先行する発信の内容を吟味する時間が生じることを意味する。さらに、オーバーラップが生じないことは、実際に伝達するまで(「送信」ボタンを押すまで)十分な時間をかけて自らの発信を練ることができることにつながる。このように、携帯メール・LINE における「よね」(または確認という行為)の減少は、文体的には極めて話しことば的でありつつ、言語産出のプロセスは従来のな書きことばとそれほど変わらない環境で生じる、典型的な言語使用の特徴として捉えることができる。

5.2 0 について

次に、0 について言及する。「よね」に関する 5.1 の考察において、対面会話と CMC の間の大まかな言語使用の違いが説明される一方、言い切りの活用語終止形 (0) の出現傾向からは、同じく CMC である携帯メールと LINE でも言語使用のあり方が一様ではないことが示唆される。

4 節では、LINE において、終助詞全体の調整頻度は携帯メールより約 1.7 倍低い一方、0 の調整頻度は寧ろ携帯メールよりも高い傾向があることを観察した。また、0 の具体的な現れ方としては特に LINE において、(4)のような一語文の増加が見られることを分析した。LINE におけるそのような、終助詞全体の出現の少なさや一語文の多さは、1 ターンの相対的な短さを示唆するものと言え、そこでのやりとりが(音声

発話には及ばないにせよ）素早いものであることと結びつけて理解できる。一方、携帯メールで相対的に終助詞が多い実態は、同様の素早さがそれほど求められない結果生じるものと推測することで統一的に説明を行える。

再掲(4) (知人Iと一緒に写真に写る人物について)

A：死相みえてる w

B：やばいよな

A：やばい

B：Iさんが生き活きしてるから際立つ

(LINE, 005)

また、以上の推測が確かである場合、その背後には少なくとも i) 表示形式の違いと、ii) 既読表示の存在という、ふたつの機能的特性の違いがあるものと思われる。

i) について、特にフィーチャーフォンによる¹⁸携帯メールは「発信一覧」「他者の発信」「自己の返信」がすべて異なる画面で示される表示形式（フォルダ形式）が採用されていた一方、スマートフォン等に基づく LINE では、同様の情報がすべて同一の画面で示される表示形式（チャット形式）が採用されている（図 1）。そのような表示形式の違いは、実際にやりとりを行う上で必要となる操作の数の上でも、利用者の意識の上でも、コミュニケーションの早さに関わるものと考えられる。

同様に ii) について、携帯メールでは参加者同士が物理的に会ったり、その他の手段で連絡を交わしたりしていないのであれば、一度発信を送ってから返信が得られるまで他者の動向が一切わからない一方、LINE では自らの発信が他者の端末で開かれたかどうかを示す機能（既読表示機能）が備わっている。そのため、他者からの発信を開いた後、必然的に返信しなければならない要請が生じると言え（加藤，2016）、その結果、コミュニケーションが早くなっていることが想定される。

三宅(2005)では、2000年代の携帯メールにおける談話の特徴のひとつとして、返信のテンポが早いことが挙げられている。一方、本稿における以上の分析及び考察は、2010年代以降、携帯メールから LINE へのモードの移行に伴って文字を基調とするコミュニケーションがさらに早くなった可能性を指摘するものである¹⁹。なお、LINE におけるそのような素早さが0以外の言語使用にもつながっているかどうかは、今後さ

¹⁸ 本稿が対象とした携帯メールの談話資料はスマートフォン登場以前のものであり、すべてフィーチャーフォンに基づくものである。

¹⁹ 落合(2021)では、実際にタイムスタンプをもとにこの点を検証した。

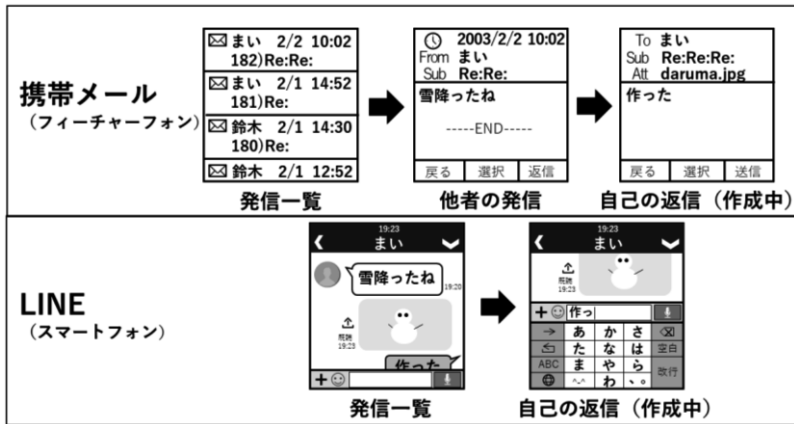


図1 携帯メールとLINEにおける表示形式 (落合, 2021, 図9)

らなる検証の余地がある。

6. おわりに

本稿では、2000年代の携帯メールと2010年代のLINE及び、それらと概ね同時期の対面会話における終助詞の使用を観察し、各談話資料で言い切りの主節終止形(0)と「よね」の出現傾向に違いがあることを示した。また、特に携帯メールとLINEにおけるそれらふたつの形式の現れ方において、メディア・モードの機能(主要なモダリティ、記録性及びオーバーラップの有無、表示形式、既読表示)のあり方との結びつきを見いだせることを論じた。一方で、そもそもデータの母数に限りがあることや既に終わったやりとりを扱う方法上の制約に起因して、未だ十分な裏付けを得られていない論点も少なくない。

今後とも幅広い言語的要素に目を向けることで、メディア・モードの機能的特性と言語使用の関係に関する体系的な分析を行う必要があるだろう。

付記

本稿は、社会言語学会第44回大会(2020年)における研究発表「メディアの機能は言語使用をどのように変えるか?—LINE・携帯メール・対面会話における終助詞の使用と不使用を例

に一」に基づくものもある。新型コロナウイルスの拡大に伴い当該の発表が予稿集のインターネット公開のみとなったため、口頭発表の場で補う予定であった内容を若干加筆した上、集計の際の誤りを修正して論文としてまとめた。

なお、形態素解析に基づく本稿の調査結果を目視で修正した上、異なる観点から分析を行ったものとして落合(2021)がある。携帯メール及び LINE における終助詞の出現傾向については、そちらも参照されたい。

参考文献

- 井上優（1997）『『もしもし、切符を落とされましたよ』—終助詞『よ』を使うことの意味—』『月刊言語』26（2），pp.62-71，大修館書店。
- 岡本能里子（2016）『雑談のビジュアルコミュニケーション—LINE チャットの分析を通して—』村田和代・井出里咲子編『雑談の美学—言語研究からの再考—』pp.17-26，ひつじ書房。
- 落合哉人（2019）『LINE テキストチャットにおける分析単位の規定と接続表現の使用傾向』『筑波日本語研究』23，pp.83-112，筑波大学人文社会科学研究所日本語学研究室。
- 落合哉人（2021）『『打ちことば』の基盤的研究』筑波大学大学院博士論文。
- 加藤由樹（2016）『既読無視と未読無視—LINE の既読表示機能に関する基礎調査—』『メディア情報研究』2，pp.17-32，相模女子大学学芸学部メディア情報学科。
- 加納なおみ・佐々木泰子・楊虹・船戸はるな（2017）『『打ち言葉』における句点の役割—日本人の大学生の LINE メッセージを巡る—考察—』『人文科学研究』13，pp.27-40，お茶の水女子大学。
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉（2019）『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版—コーパスの設計と特徴—』『国立国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書』3，国立国語研究所。
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版。
- 佐竹秀雄（2005）『メール文体とそれを支えるもの』橋元良明編『講座社会言語科学 2 メディア』pp.56-68，ひつじ書房。
- 総務省情報通信政策研究所（2020）『令和元年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』（https://www.soumu.go.jp/main_content/000708016.pdf）〈2021年8月25日閲覧〉。
- 田中弥生・柏野和佳子・角田ゆかり・伝康晴・小磯花絵（2018）『『日本語日常会話コーパス』の構築—会話収録法に着目して—』『国立国語研究所論集』14，pp.275-292，国立国語研究所。
- 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院。

- 田中ゆかり (2014) 「ヴァーチャル方言の 3 用法—『打ちことば』を例として—」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』pp.37-55, ひつじ書房.
- 橋本修 (1992) 「終助詞『ね』の、意味の型とイントネーションの型—長く急激な下降イントネーションの解釈を中心に—」『日本語学』11 (11), pp.89-97, 明治書院.
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法—データの収集と分析—』pp.43-72, ひつじ書房.
- 三宅和子 (2005) 「携帯メールの話しことばと書きことば—電子メディア時代のヴィジュアルコミュニケーション—」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアとことば2』pp.234-261, ひつじ書房.
- 三宅和子 (2006) 「携帯メール分析共有データ 2003 年度版、2004 年度版、2005 年度版」平成 15 年度～17 年度科学研究費補助 基盤研究(C) 研究成果報告書『携帯電話利用が若者の言語行動と対人関係におよぼす影響に関する調査・研究』(代表：三宅和子、課題番号：15520271), pp.67-145.
- 宮寄由美・林直樹・田中ゆかり・三宅和子 (2020) 「一般公開を視野に入れた『携帯メールコーパス』整備の試み—加藤安彦氏の遺志を受けて—」『社会言語科学会第 44 回大会発表論文集』pp.262-265, 社会言語科学会.
- Baym, N. (1995) The emergence of community in computer-mediated communication. In Jones, S.G. (Eds.), *CyberSociety: Computer-mediated communication and community*, pp.138-163, Thousand Oaks: Sage Publications.
- Clark, H.H., & Brennan, S.E. (1991) Grounding in Communication. In Resnick, L.B., Levine, J.M., & Teasley, S.D. (Eds.), *Perspectives on Socially-Shared Cognition*, pp.127-149, Washington, D.C: APA Books.
- Herring, S.C. (2007) A faceted classification scheme for computer-mediated discourse. *Language@Internet*, 4-1. (<https://www.languageatinternet.org/articles/2007/761>) (2021 年 8 月 25 日閲覧) .
- Herring, S.C. (2013) Discourse in Web 2.0: Familiar, Reconfigure, and Emergent. In Tannen, D. & Trester, A.M. (Eds.), *Discourse 2.0: Language and New Media*, pp.1-25, Washington, D.C: Georgetown University Press.
- Herring, S.C. (2018) The Co-Evolution of Computer-Mediated Communication and Computer-Mediated Discourse Analysis., In Bou-Franch, P., & Garcés-Conejos Blitvich, P. (Eds.), *Analyzing digital discourse: New insights and future directions.*, pp.25-67, London: Palgrave Macmillan.
- Herring, S.C., & Androutsopoulos, J. (2015) Computer-Mediated Discourse 2.0. In Tannen, D. Hamilton, H., & Schiffrin, D. (Eds.), *The Handbook of Discourse Analysis, Second Edition*, pp.127-151, Hoboken: John Wiley & Sons.

メディア・モードの機能は言語使用をどのように変えるか？（落合哉人）

Murray, D.E. (1988) The context of oral and written language: A framework for mode and medium switching.

Language in Society, 17, pp.351-373.

おちあい かなと／人文社会系

(2021年8月25日受理)